令和3年度 ミュージアム活性化事業「特別展」評価 集計表

館 名	秋田県立美術館
展覧会名	秋田県誕生150年記念 ルーヴル美術館の銅版画展

【評価方法】
・「A（十分に達成できた）」は**4**、「B（達成できた）」は**3**、「C（やや十分でなかった）」は**2**、「D（十分でなかった）」は**1**、「未記入」は**0** として、各運営協議会委員から評価いただき、平均3．0以上を目指す。
※下表の「平均」は各運営協議会委員からの評価をもとにした平均値を、「自由記述」は各委員からいただいた御意見を記載している。

		平均	自由記述
1 実施のねらい	Ⅰ 県民ニーズに応える内容	3.2	・美術ファンにとっては嬉しい特別展であるが、果たして県民の興味を喚起できたかという点では疑問が残る。 ・広告、ポスター等が地味で、その展覧会がどんなものか、銅版画とはどんなものか、うまく伝えきれていなかったと思う。セールス・ポイントは「ルーヴル美術館」の名前だけ、という感じであった。 ・秋田県立美術館とルーヴル美術館に関係があったこと以外、銅版画とはどういうものかという情報が少なすぎた。 ・宣伝の仕方が地味で、魅力を感じないと思う。 ・「ルーヴル」という、誰にとっても馴染みある美術館の所蔵品展であったが、銅版画ということで集客は難しかったのではないか。版画の中でもカルコグラフィーという秀逸なコレクションであるという部分が、もう少し分かりやすく伝われば良かったかと思う。そのため、この展示内容で、調査・研究、秋田の芸術・文化・自然の素晴らしさ・・・という部分を評価するのは少し無理があるかと感じた。 ・秋田県との関連は薄かったと考えられるが、写真技術等の無かった時代に、著名な美術作品を版画によって広報・普及したという歴史や価値などを秋田県民に認識させたことは大きな成果である。 ・秋田県の作家の特別展ではないが、世界的名画に触れて秋田の財産(絵画作品）と比較するなど、互いの価値を感じ取れる一大企画だったと思う。
	Ⅱ 調査研究成果の普及	2.2	
	Ⅲ 県内外客の呼び込み	3.0	
2 実施の工夫	Ⅰ 鑑賞方法・展示構成の工夫	3.0	・展覧会全体が美しく構成されていた。歴史的時代による配置は理解しやすいものであった。しかし、これらの銅版画が何であるか、どのように作られたのか、なぜ、誰のために作られたのかなどの情報は最小限であった。銅版画を作るために使用された技術についての情報は、ほとんど無かったように思う。絵画の複製として作られたものと、その中で芸術作品として意図されたものとの区別もなかった。展示されている版画の大部分は写真の前の時代に作られたが、それらを作った彫刻家のスキルはほとんど認められなかった。これらの彫刻家の名前は知られている。銅版画を製造する様々な技術は、触れられず、区別もされていなかった。エッチング、彫刻、メゾチント、アクアティント、ドライポイント等、様々な技術で作られた作品が展示されていたが、肝心の技法について詳しく紹介されていなかった。現代の美術品と考えられる銅版画のlimited Editionと違って、ルーヴル美術館の版はスチールメッキされている。これらは無制限の回数で利用できるように意図されている。（こうしたことについては、銅板からの印刷のプロセスを紹介する映像コーナーでのみ簡単に触れられていた）。もともと、この銅版画が誰のために作られたのか、そしてこの版画らがヨーロッパの芸術の普及にどのような役割を果たしたのかを、もう少し来場者に知ってもらえたら良かったと思う。 ・ギャラリートークや講演会に参加できず残念であった。しかし、その様なイベントの実施は大事だと思う。伊藤由美子氏のワークショップに関して、県民の版画に関する意識を高める事は応援すべきと思う。 ・秋田県立美術館は、トップレベルの美術館や大学との良好な関係を保つ事が重要である。その情報を公開することは、県内外の博物館への敬意を高める役割を果たすと考える。 ・カルコグラフィーへの理解を深めるという点で、講演会の内容は良かったと思う。ワークショップの”パスタマシン”で版画制作というのはユニークであった。 ・講演会をリモートで行ったことは、新型コロナウィルス感染症拡大防止対策のみならず、今後の講演会等の在り方の参考になると考えられる。作品解説は主に版画の原作の紹介となっていた。当然、必要なことであるが、版画作品そのものの美しさや、原作の再現性などにも言及してよかったのではないか。
	Ⅱ 付帯イベントの工夫（展示内容に対する興味、関心、理解）	3.4	
	Ⅱ 付帯イベントの工夫（ワークショップ等の工夫）	3.0	
	Ⅲ 外部団体との連携の工夫	3.4	
3 展示の内容	・国内外で愛好される名品を取り上げたものであったか	3.8	・デューラーのエッチングと藤田のドライポイントは面白かった。それぞれの彫刻士（彫版工）の技法を細見する事が出来て勉強になった。幅広い時代の作品は面白かったが、それぞれの時代の銅版画の役割と、文化にどのような影響があったかについては、もっと知りたかったと思う。 ・国内外で万人が愛好というよりは、専門的な嗜好が強い内容であったと思う。版画の原本である作品や作家名は著名なものだが、なぜそこから銅版画が制作されるようになったかなど、もう少し分かりやすく伝われば良かったかと思う。 ・展示された版画作品は、原作が全て著名であり、かつ原作よりも表現内容が理解しやすいものが多かった。よって、展示内容は親しみやすく、楽しむことができた。 ・小児や幼児がルーヴル関連のもので遊べるワークショップなどがあると幅広い集客があるかもしれない。簡単なパズル（モナ・リザや美術館の形とか）や、顔はめパネル（記念写真）コーナー、塗り絵など。
	・幅広い世代が楽しむことができる内容のものであったか	3.2	
	平 均	3.1	

令和3年度　ミュージアム活性化事業「特別展」評価　集計表

館　名	秋田県立美術館
展覧会名	生誕120年　木村伊兵衛回顧展

【評価方法】
・「A（十分に達成できた）」は**4**、「B（達成できた）」は**3**、「C（やや十分でなかった）」は**2**、「D（十分でなかった）」は**1**、「未記入」は**0** として、各運営協議会委員から評価いただき、平均3．0以上を目指す。
※下表の「平均」は各運営協議会委員からの評価をもとにした平均値を、「自由記述」は各委員からいただいた御意見を記載している。

		平均	自由記述
1 実施のねらい	Ⅰ　県民ニーズに応える内容	4.0	・木村作品だけでなく、秋田派の写真家達による作品も展示するなどの工夫は評価したい。 ・テレビ宣伝、ポスター等は魅力的であった。普段はそれほど写真展に興味がないが、観たいという気持ちになった。 ・写真家のこと、写真の歴史、昭和期の歴史や秋田の文化など、興味深かった。 ・本来ならば、もっと来場者があったのではないか。新型コロナウイルスの蔓延が要因であったと思う。 ・木村伊兵衛は「シリーズ秋田」を撮影した写真家であり、県民にとっては馴染み深い作家・作品の数々であった。県民ニーズ、集客につながる内容であったと思う。 ・デジタルではない白黒写真による、木村及び秋田県の写真家の作品を一堂に集めたことは、写真芸術の素晴らしさや、白黒写真の独特の表現力、そして秋田をはじめとする各風土に向き合った写真家の視点の鋭さや深さを秋田県民に再認識させてくれた。残念なことは、写真芸術を認め、楽しむことが、秋田県民に浸透していないことと考えられる。
	Ⅱ　調査研究成果の普及	3.4	
	Ⅲ　県内外客の呼び込み	3.4	
2 実施の工夫	Ⅰ　鑑賞方法・展示構成の工夫	3.6	・草彅さんの鶏卵紙プリントは、面白い企画だったと思う。 ・展示は綺麗であった。説明が分かりやすく、写真家の活動とその歴史的な役割がよく理解できるようになった。 ・鶏卵紙プリント講座は、面白そうだと思った。 ・展覧会監修者・田沼氏のリモート講演会に、参加者が多かった。新型コロナウイルスがなくなっても、リモート形式の講座があっても良いと思う。 ・展示については、「シリーズ秋田」が3階ギャラリー展示で窮屈な印象を受け、ちょっと物足りない感じがした。1階県民ギャラリーが良かっただけに残念である。田沼先生の講演会は、共催である『秋田魁新報』文化欄への複数の記事掲載などが、展覧会の魅力を伝え、集客につながり、とても良かったと思う。ワークショップは古典写真技法によるものだったので、木村の写真との関連性の点で、少し違和感があった。チラシの文字だが、特に表面が小さかった。高齢者には見づらいので、今後は留意して欲しい。 ・講演会をリモートで行ったことは、新型コロナウィルス感染症拡大防止対策としてだけでなく、今後の講演会などの在り方の参考になると考えられる。ワークショップの内容については、講師の着実で多彩な実績などから考えると、別の内容のものが、もう一つあってもよかったのではないか。展示した写真作品のサイズが全体的に同じように見えたので、入場者には焦点が定めにくかったのではないだろうか。諸条件が許すのであれば、メインとなる作品のサイズを大きくして展示していれば、入場者はより興味や関心をもって、観覧できたのではなないか。
	Ⅱ　付帯イベントの工夫（展示内容に対する興味、関心、理解）	3.8	
	Ⅱ　付帯イベントの工夫（ワークショップ等の工夫）	3.6	
	Ⅲ　外部団体との連携の工夫	3.8	
3 展示の内容	・国内外で愛好される名品を取り上げたものであったか	4.0	・10,000人を超えるかと思ったが、入場者数が9,586人は意外である。 ・名作が豊富な展覧会であった。写真家の観点から世界のあちらこちらを見たり、雰囲気のある文化人の似顔、懐かしい昭和時代の環境、あわせてとても深みのある展覧会であった。当時の秋田県民の美しさや温かい人間味がよく伝わってきた。写真家が、世界をある程度傍目で見ていた感じがしたが、感動した。 ・「シリーズ秋田」だけでなく、写真家・木村伊兵衛が持つ写真の魅力をトータルで再認識できる内容であった。スペースの問題もあっただろうが、秋田の写真家達の紹介部分に、もうひとつ深みが欲しかった。
	・幅広い世代が楽しむことができる内容のものであったか	3.6	
	・秋田ゆかりの人物や業績を理解するのに十分な内容であったか	3.2	
	・秋田の芸術・文化・自然の魅力を伝え理解が深まる内容であったか	3.6	
	平　均	3.6	

※令和3年度は、10月に第1回運営協議会を開催したため、それ以降の特別展2本（「ルーヴル美術館の銅版画展」「木村伊兵衛回顧展」）を評価の対象とした。

令和3年度 ミュージアム活性化事業「特別展」評価 集計表

館 名	秋田県立近代美術館
展覧会名	ときめく美人画展 培広庵コレクション

【評価方法】
・「A（十分に達成できた）」は**4**、「B（達成できた）」は**3**、「C（やや十分でなかった）」は**2**、「D（十分でなかった）」は**1**、「未記入」は**0** として、各運営協議会委員から評価いただき、平均3．0以上を目指す。
※下表の「平均」は各運営協議会委員からの評価をもとにした平均値を、「自由記述」は各委員からいただいた御意見を記載している。

		平均	自由記述
1 実施のねらい	Ⅰ 県民ニーズに応える内容	2.9	・非常に興味深く、見ごたえのある展示であった。私はときめいた。時代によって理想の美人像は移り変わるが、今の時代において、このテーマで展示を行うことも面白いと思った。 ・内容は興味深いものであったが、秋田の芸術文化の素晴らしさを伝えるという観点は弱かった。県内外客の呼び込みについては入場者数が目標に届かず、C評価とせざるを得ない。また、広報面では、「培広庵」という、ほとんどの人が知らない名称をタイトルにしたことが効果的であったか、今後検討してほしい。 ・入館者数目標・実績からすると、多くの県民の興味の掘り起こしはできなかったといえるのではないか。本当に“美術や絵が好き”という人でなければ、なかなか足が向かないテーマと感じる。ターゲットとなる年齢層、集客層も非常にコアな感じがする。 ・集客につながる内容となっているか･･･については、入館目標を大きく下回っているために“D”とした。いずれの（ほとんどの）展覧会でも下回っているが、コロナ禍であることを考慮すれば、やむを得ないとも思われる。 ・観覧できなかったため、入館者の目標数と実績、7月の協議会での皆さんのご意見をもとに判断した。 ・残念ながら鑑賞できなかったため、Ⅱの回答に答えるのは難しい。
	Ⅱ 調査研究成果の普及	2.9	
	Ⅲ 県内外客の呼び込み	2.6	
2 実施の工夫	Ⅰ 鑑賞方法・展示構成の工夫	3.2	・ワークショップはどのような内容で実施されていたか？ フライヤーに記載がないので分からない。 ・どのように外部団体と連携を図ったのかが伝わりづらいかもしれない。 ・展示構成は興味深かった。ただ、付帯イベントや連携については、入場者数の状況から判断せざるを得ない。 ・Ⅲ外部団体との連携の工夫は、評価に迷うところである。もっとやれるのではないかという期待を込めて“C”とさせていただいた。（他の2つの展覧会も！） ・特製の薄型ケースを用意しての展示という意気込みに感激した。 ・前回の協議会でもお伝えしたかもしれないが、そのような「展示に向けての努力」をもっと事前に知ることができると興味関心が高まるだろうし、シンプルに皆さんのやる気に感激し、応援したくなるように思う。 ・ニュース・アーク（近代美術館広報紙）を読む限り、鑑賞できなかったことはつくづく残念に思う。名品を一堂に会しての展覧会だっただけに、一層その思いを強くしている。
	Ⅱ 付帯イベントの工夫（展示内容に対する興味、関心、理解）	2.9	
	Ⅱ 付帯イベントの工夫（ワークショップ等の工夫）	3.0	
	Ⅲ 外部団体との連携の工夫	2.4	
3 展示の内容	・国内外で愛好される名品を取り上げたものであったか	3.2	・出品作品は優れているものも多かった。一方で、秋田との関わりについては、それほど強くは感じられなかった。 ・実際に観ると、各画家の特徴がそれぞれで見ごたえはあった。 ・興味のある層が限られる展示であるため、非常に入場者実績の面では厳しかったと思う。しかも、予算が限られる中での告知方法は難しい。内容が素晴らしくても、見に来てくれる人がいないことには･･･。いかに訴求していくかが課題であると思う。 ・実際に足を運ぶ事ができなかったが、資料を見て評価を付けさせていただいた。 ・観覧できなかったため、入館者の目標数と実績、7 月の協議会での皆さんのご意見をもとに判断した。 ・秋田との関わりは、いまひとつ分からないので、評価が難しい。
	・幅広い世代が楽しむことができる内容のものであったか	2.6	
	・秋田ゆかりの人物や業績を理解するのに十分な内容であったか	2.7	
	・秋田の芸術・文化・自然の魅力を伝え理解が深まる内容であったか	2.8	
	平 均	2.8	

令和3年度　ミュージアム活性化事業「特別展」評価　集計表

館　名	秋田県立近代美術館
展覧会名	カラクリ展　動くしくみが丸わかり

【評価方法】
・「A（十分に達成できた）」は**4**、「B（達成できた）」は**3**、「C（やや十分でなかった）」は**2**、「D（十分でなかった）」は**1**、「未記入」は**0** として、各運営協議会委員から評価いただき、平均3．0以上を目指す。
※下表の「平均」は各運営協議会委員からの評価をもとにした平均値を、「自由記述」は各委員からいただいた御意見を記載している。

		平均	自由記述
1 実施のねらい	Ⅰ　県民ニーズに応える内容	3.8	・大人も子供もわくわくする展示内容だったと思う。 ・入場者が多かった背景を分析し、今後に生かしてほしい。地元の芸術文化という要素は感じられなかった。 ・テーマがキャッチーでビジュアルも楽しそう。小学生の娘や、その周囲の親からも展示について聞かれることが多かったし、入場実績から見てもねらいは達成できたと思う。Ⅱについては私の理解不足である。展示そのものがⅡとは結びつかなくてCにした。 ・カラクリ展の実施のねらいに「秋田の芸術・文化・自然の素晴らしさを伝える」ことがあったとしたら、それにつなげる仕組みが必要であったと考える。それが“C”とした理由。「知識と理解を深める」という点では“A”だったと思う。 ・『秋田の芸術・文化・自然の素晴らしさ』は、海外作家の展示が主であった理由でDとしており、“至らなかった” という意味ではない。 ・小学生の子どもと一緒に楽しませてもらった。見て、触れて、仕組みを理解する手助けとなっており、知的好奇心をくすぐる内容であった。
	Ⅱ　調査研究成果の普及	2.3	
	Ⅲ　県内外客の呼び込み	3.7	
2 実施の工夫	Ⅰ　鑑賞方法・展示構成の工夫	3.6	・ちょうど夏休み時期も重なり、大人も子供も充実した時間を過ごしたと思う。東北出身の作家である鈴木完吾さんの作品が加わっているのも良かった。 ・入場者が多かったのは、夏休み時期だったこともあるかと思った。子どもも楽しめる内容であり、「ふるさと館」との連動が成功したのかどうかも知りたかった（アンケートでは子どもの割合が高い）。その点はもう少し材料があれば分析が深まり、今後にいかせるのではないか。 ・実際に展示物を触れるようになっていたのが良かった。美術館なのに“見る”だけでなく“体験要素”があると、ぐっと満足度もあがると思う。 ・私自身の好きなジャンルということもあり、開催前からとても楽しみにしていた。テレビCMもよく目にした。『カラクリ』のためテレビCMはとても相性が良いなと思ったし、資料のイベント情報源の数値にもよく現れていると感じた。 ・テレビCMとも連動してPR効果は大きかった。子どもだけでなく大人も楽しめるのに十分な展示内容だった。海外のものは、それぞれのお国柄が反映されており、面白かった。ギャラリートーク、ワークショップは参加できなかった。
	Ⅱ　付帯イベントの工夫（展示内容に対する興味、関心、理解）	3.3	
	Ⅱ　付帯イベントの工夫（ワークショップ等の工夫）	3.4	
	Ⅲ　外部団体との連携の工夫	3.1	
3 展示の内容	・国内外で愛好される名品を取り上げたものであったか	3.5	・幅広い世代に興味関心を持っていただけたのではないか。 ・カラクリのしくみが良く分かり、“作ってみたい”と思わせてくれる展示であった。鑑賞者として作品を観ることもできるし、作り手側の視点で観ることもできる、ワクワクする内容であった。 ・興味深い展示であったと感じた。 ・本来の“美術”という視点ではないが、幅広い年代に楽しんでもらえたり、リピートする来場者もいたり、こういう特別展が分かりやすいのだと思う。夏休み中ということもあり、たいへん賑わったようで喜ばしいことである。これをきっかけに美術館を好きになってくれるといいと思う。 ・来場者は親子層が中心だったかもしれないが、誰もが子供の頃に夢見た世界に戻れるような展示物ばかりで、親であってもなくても（子供の存在に関係なく）たくさんの世代が楽しめるものだったと思う。また、子供の頃に考えたような “工作” から精度を上げ、芸術品の域に仕上げた今回の展示物は本当に素晴らしく美しく、素敵な作品を直で見れたことにも感激した。 ・夏休みに合わせたタイミングも効果的。自由研究の題材にもなったのではないか。大変面白い企画であった。
	・幅広い世代が楽しむことができる内容のものであったか	3.7	
	平　均	3.4	

令和3年度 ミュージアム活性化事業「特別展」評価 集計表

館 名	秋田県立近代美術館
展覧会名	生誕100年 滝平二郎展 ～ものがたりを描いた画家

【評価方法】
・「A（十分に達成できた）」は**4**、「B（達成できた）」は**3**、「C（やや十分でなかった）」は**2**、「D（十分でなかった）」は**1**、「未記入」は**0** として、各運営協議会委員から評価いただき、平均3．0以上を目指す。
※下表の「平均」は各運営協議会委員からの評価をもとにした平均値を、「自由記述」は各委員からいただいた御意見を記載している。

		平均	自由記述
1 実施のねらい	Ⅰ 県民ニーズに応える内容	3.4	・入場者数は目標には届かなかったが、有料入場者数は目標を上回った。アンケートによると県外から訪れた人の割合も高く、この展覧会を見に来た人も一定数いたと感じられ、「集客」という意味では力があったのではないか。アンケートの文面からも来場者の熱量が感じられた。展示内容も興味深く、秋田との関わりも感じられた。 ・絵本など、幅広い年代層に認知されている作風。皆どこかで一度は見たことのある作家ということで来場動機につながったと思う。 ・観覧できなかったため、資料をもとに判断した。 ・秋田との意外な関わりがうかがえて勉強になった。作風の変遷が分かり、滝平の全貌がうかがえる好企画だった。
	Ⅱ 調査研究成果の普及	3.5	
	Ⅲ 県内外客の呼び込み	3.1	
2 実施の工夫	Ⅰ 鑑賞方法・展示構成の工夫	3.4	・関連イベントが盛り沢山で、興味をそそられるものが多かった。 ・付帯イベントについては体験していないため評価しがたいが、ラインアップを見る限り充実していたと思われる。 ・吊り下げたり展示に変化があるのが楽しい。写真を撮れるのも記念になるので良かった。 ・ワークショップを行っていない展覧会においては、評価のしようがないので、はじめから削除しておいた方が良いと思う。 ・アンケートの回答数の多さから、来館者の興味関心を高め、満足してもらえた展示だったのではないかと感じた。 ・滝平さんの前回の展示は私も来場しており、前回との違いはあるのかな？と若干心配してたのですが、前回からの変化を楽しんでくださる声があり、安心とともにファンにはとても嬉しい企画だったのではと感じる。 ・アンケートの要望が今後の展示方法の向上にとても役に立つ内容だったと思う。 ・遺族の協力を得て、めったに展示されない作品も展示されたと聞く。作者の興味、関心は尽きることがなく、それが多彩な作品に昇華されたことが分かった。Ⅱはいずれも参加できなかったが、展示内容を鑑賞できただけで満足できた。
	Ⅱ 付帯イベントの工夫（展示内容に対する興味、関心、理解）	3.3	
	Ⅱ 付帯イベントの工夫（ワークショップ等の工夫）	3.2	
	Ⅲ 外部団体との連携の工夫	3.1	
3 展示の内容	・国内外で愛好される名品を取り上げたものであったか	3.4	・懐かしく見学させていただき、昔（幼少期）を思い出した。 ・滝平二郎には“モチモチの木”の暗いイメージしかなかったけれど、この展示を観て、こんなにも豊かな表現をしている人だったのかと驚いた。制作の工程なども知ることができ、充実した展示であった。 ・質量ともに来場者の満足が得られる内容だったのではないか。選択肢にはないが、秋田との関わりを感じられる内容だと思った。 ・アンケートの記述にもあるが、懐かしむご意見が多く、やはり身近に感じられる作品が多かったのが良かったのだと思う。来場者の期待に十分応えた内容だったと思う。 ・滝平氏も秋田ゆかりの人物かと思いますので、勝手ながら評価させていただく。 ・海外での愛好についての点が図りかねてしまい、B にしている。 ・今幼い子供が見ても楽しめるでしょうし、「昔教科書で見た」と言う声からも、時代を超えて親しめる作品であり展示だったのだろうなと感じた。「昔はこんな暮らしをしていたと知った」など、今はない文化を知ることもできる展示だったのだと思う。 ・創作過程を垣間見ることもでき、随所に工夫がうかがえた。最後の大作品は、来場者ならば誰もがスマホを向けたのではないだろうか。滝平の魅力を再認識できた。
	・幅広い世代が楽しむことができる内容のものであったか	3.5	
	・秋田ゆかりの人物や業績を理解するのに十分な内容であったか	3.0	
	・秋田の芸術・文化・自然の魅力を伝え理解が深まる内容であったか	3.0	
	平 均	3.3	

令和3年度　ミュージアム活性化事業「特別展」評価　集計表

館　名	秋田県立博物館
展覧会名	特別展　佐竹氏遺宝展－守り継がれた大名家資料－

【評価方法】
・「A（十分に達成できた）」は**4**、「B（達成できた）」は**3**、「C（やや十分でなかった）」は**2**、「D（十分でなかった）」は**1**、「未記入」は**0** として、各運営協議会委員から評価いただき、平均3．0以上を目指す。
※下表の「平均」は各運営協議会委員からの評価をもとにした平均値を、「自由記述」は各委員からいただいた御意見を記載している。

		平均	自由記述
1 実施のねらい	Ⅰ　県民ニーズに応える内容	3.6	・新聞紙面での事前連載などPRもあり、関心を高められた。 ・秋田県誕生150年記念で、県民の多くが関心あるものだった。 ・節目の年にそれに関わる特別展が開催され意義があった。 ・新型コロナ禍にあっては集客、特に県外からは難しかった。 ・佐竹家の説明がとてもよかった。いろいろな事がわかった。 ・テレビ新聞の宣伝とてもよかった。 ・できれば途中に休むスペースがほしかった。 ・秋田の歴史に興味を持っている方々を引きつける展示内容。 ・感染対策を充分に行った上で開催できていた。 ・秋田県150年の節目にあたり現在の秋田の礎となった佐竹家12代を美術品と資料で振り返ることの意義は大きいものがある。ただし、秋田藩ゆかりの資料を紹介するに留まった感がある。
	Ⅱ　調査研究成果の普及	3.5	
	Ⅲ　県内外客の呼び込み	3.2	
2 実施の工夫	Ⅰ　鑑賞方法・展示構成の工夫	3.5	・東大史料編纂所の方のオンライン講演など見所は多かった。 ・他機関との研究成果の展示は分かりやすかった。 ・展示場所により解説が見にくい（文字が小さい、解説が下の方にある）所があり。（年配の方には不便かも。） ・映像による紹介なども次回検討してみてはどうか。 ・新聞社と連携し特別展の内容が複合的に紹介されよかった。 ・肖像画一覧はやはり見応えがあった。 ・魁新聞に連載が組まれるなど多くの人の目にとまり興味・関心を持てた。 ・講演会の開催で、より理解を深めることができた。 ・関連行事は確実に展示品の理解を深めた。 ・古文書の修復についての説明も理解の一助となった。 ・展示品に照明が当たり見やすいところと、自分の影になり見づらいケースがあり少々気になった。 ・千秋文庫や天徳寺の所蔵品は目にする機会がない貴重なもので他機関との連携で初めて実現した。この展示ができたこと自体評価に値する。 ・展示構成で初代からの掛け軸があったが、誰でもわかる説明がほしかった。 ・外部団体との連携はとてもよかった。 ・人物の人となりをうかがうことができるキャプションが興味深かった。 ・12代が同じ扱いに見え展示内容が平板になっているので、人物とその功績に焦点を当て、ドラマ性を持たせた展示に寄せた方が一層興味深くなったと思う。また、佐竹家の歩みが特別展だけでなく常設展示室の歴史とも連携させながら見せる工夫もあると思う。
	Ⅱ　付帯イベントの工夫	3.4	
	Ⅲ　外部団体との連携の工夫	3.7	
3 展示の内容	・幅広い世代が楽しむことができる内容のものであったか	2.7	・小学生の長男と訪れたが歴代肖像画や甲冑に興味を示した。 ・佐竹文書の内容は佐竹氏と歴史上の人物との交流が分かり大変貴重だった。 ・幅広い世代に関心を持ってもらえたのではないか。 ・歴史的な部分と芸術的な部分を知ることができた。 ・佐竹文書は県内初の展示で、拝見できてよかった。 ・甲冑の展示方法について、一か所に並べて比較しながら鑑賞することがあってもいいと思う。 ・漆をベーズに蒔絵や螺鈿を施した箱等の展示は、四方から鑑賞できるよう個体一つ一つを独立型に配置するのもよい。 ・すばらしい特別展でした。 ・若い世代にとっては足を運びたくなる展示だったかと言えば少々難易度が高かった。 ・小学生程度には興味を持ち理解するには難しい。 ・小学生の団体がいたがちょっと難しいかなと思った。 ・子供が楽しめる工夫がもう少しほしいと思った。 ・佐竹氏の業績などが資料からひも解ける内容でした。 ・兜や鎧は子どもの目を引きつけるものであると感じた。 ・子供への理解を深めるための工夫（解説にふりがな、映像による説明）が必要。
	・秋田ゆかりの人物や業績を理解するのに十分な内容であったか	3.5	
	・秋田の芸術・文化・自然の魅力を伝え理解が深まる内容であったか	3.4	
	平　均	3.4	